

事業活動実績報告書

施 設 名	葛飾こどもの園幼稚園	
教 育 理 念	愛され必要とされる実感を持ち、多様な人を受け入れつながり合う人間教育の追求	
1 事業名	インクルーシブな保育実践の推進 ―活動の見直しから仲間となっていく過程―	
2 実施期間	令和7年 4月1日 ～ 令和8年 3月31日	
3 取組概要	(取組日) 令和7年 4月 11日 ～ 令和7年 5月9日 (実施内容) 今、目を向けるべき子ども 林間を想定して 今年の各クラス年長児の状況や子ども一人ひとりの様子を、各クラス担任(研究チームの担任)が保育をととして仲間関係やかかわりなど見守り観察する。並行して例年の”お泊り保育”(林間保育)を今年の新たな年長児と作っていく保育を想定しイメージしていく。	
	(取組日) 令和7年 5月12日 ～ 令和7年 5月30日 (実施内容) 林間保育(お泊り保育)の話し合い 各クラス年長児による”林間保育”の準備に向けた子どもと共に考えるための話し合い。①この林間保育をなんのために行うのか。②日程とプログラム、活動内容について。③宿泊する宿について具体的に知る。子どもたちから出てくる疑問や戸惑い、提案やアイデア、また、年長児の意欲や仲間関係の様子など持ち寄り”仲間づくり”をテーマとして活動を立てていった。	
	(取組日) 令和7年 6月2日 ～ 令和7年 6月13日 (実施内容) 子どもと”向き合う”ための保育者の話し合い 仲間づくりのための活動として、例年全年長児が集まり林間保育に向けて活動を作っていくこととしていたが、年長担当中堅保育者から「今年の、例年以上に個性豊かな子どもたちで構成されたクラスを運営していく時に、年長児全員を集めた活動とするのではなく、よりクラス担任が自分のクラスの子どものと向き合えるような少人数で活動を進める必要があるのではないか」と提案があり、具体的な活動方法の変更が議論された。	
	(取組日) 令和7年 6月16日 ～ 令和7年 6月30日 (実施内容) 対象児Bの様子から感じ始めたこと 各クラス7名の年長児が担任と仲間づくりのための活動を繰り返した。まずは、4月からクラスなど生活環境が変わり不安も感じるためか、毎日の給食を皆と食べることができないある年長男児Bと話し園庭につながるデッキ部分で給食を保育者と二人で食べることにした。対話することを大事に繰り返し、途中から2名仲間を加えて3か月ほど続けられた。2人となるとよく話をし落ち着き楽しんでいった。6月ごろから2名の年長児を入れて共に給食を食べるようにしたが、本児が中心となるよう配慮し進めることでより楽しんでいった。	
		

3	取組概要	(取組日) 令和7年 7月1日 ～ 令和7年 7月15日 (実施内容) 林間保育見直しに伴う子どもとの話し合い 新潟県でのお泊り保育に向けて、6月下旬より準備のために話し合いが始まった。今年度は、例年のように年長児全員が集まり毎日林間保育に向けて準備をしていく年齢別活動を取り止め、担任が子どもと”向き合う”ことを大切に考え、各クラス7、8名の年長児とクラス担任による林間保育に向けての準備と計画をしていくこととした。クラスに計画を任された範囲は、一日目の川遊び、二日目のハイキング、三日目のキャンプファイヤー、その他皆で同時に行う食事以外を子どもと自由に活動する時間とした。そこで、対象となる年長男児Bとそのクラスの年長児7名がクラスでない別室を使い給食を食べ話し合う時間(約40分程度)を持ち、7月中旬のお泊り保育直前まで行った。お泊り保育を想像してワクワクしながら仲間意識を作ること”をわらい”として、話し合いを繰り返した。まずは、現地宿泊施設や活動する場所、内容を話しイメージすることができるようにする。そこから、なんでも話してみる、思うことをだせるよう単純なテーマを持つ。してみたいこと、食べたいおやつのこと、お土産のこと、なぜ林間に行くのか?などから、仲間とは?、お話作り、具体的活動を考える時とした。	
		(取組日) 令和7年 7月16日 ～ 令和7年 7月18日 (実施内容) 林間保育での子ども主体の活動から お泊り保育3日間のなかで、クラスで現地に電話したりなどして準備してきた新潟のお土産(お米やおまめ)、楽しみにしていた花火をパーキングや現地で買いに行ったり、最終日のパーティーのための準備を考え、自分たちで宿のおじさんに聞きに行くなど動き出していた。一日の活動の間の隙間時間を自分たちで計画し楽しみを作り出すということから、保育者も子どもと一緒にワクワクし始めていることを感じていた。現地での活動については、自分たちで動き出して活動を作り出して子どもたちと共に対話を積み重ね活動していく傍ら、配慮を必要とする年長男児Bがグループの中心で活動できるよう、興味関心を生かしたり、男児Bの思いや意見が皆に伝わるように確認して皆に報告したり、男児Bの思いが生かされるような活動も仲間と作っていった。子どもの声では、いつもいざこざの絶えない相性の悪い女児と二人で潜り泳ぎ続けた川遊びで、その女児から「私たちすごいよね!」と声を掛け合い意気投合するようにはしゃいだり、風呂に友達と入ることを嫌がり参加を嫌がっていたが、気持ちを開放するような活動の後には仲間と風呂で泳ぎ回り屈託のない様子が大笑いしていた。一緒に楽しんだ男の子から「あんなに嫌だと言っていたのに～ちゃん一番泳いでいたよね」と声が上がっていた。	    

3	取組概要	(取組日) 令和7年 9月16日 ～ 令和7年 10月10日	
		(実施内容) 林間保育後の子どもたちの気持ちの葛藤 林間保育(お泊り保育)を終えて、新学期を迎えると子どもたちから林間保育に向けて繰り返してきた昼食をとりながらのミーティングを思い出し「また、ランチミーティングをやりたい!」という声上がり、運動会に向けての話し合いの場”フェスティバルミーティング”を始めることになった。この場も昼食を含めクラスの年長児7名で毎日40分程度1か月ほど続けられた。足が速く走ることが大好きではあるがリレー競技となると動けなくなり、何故か競技者に対して罵声を浴びせるような態度をとることが続いたある日は、その年長男児Bに対して「だんだん走らないでちゃんと走ってよ」と発言されると「そういう言い方しないでよ、嫌な気持ちになる。工作したかったんだよ」と男児B。林間保育で自然と皆で楽しんで経験した分、暴言を吐き参加しようとしないう男児Bに対して仲間から気持ちが噴出する。「リレーは勝つためにするのだから出ない」との男児Bに対して「林間保育楽しかったじゃないの。なんで走らないの?」と理由を言葉にできないというか、客観的に自身を捉えることができず、理由を感じられていない?ようにも感じられた。こんな、相手の分からない気持ちに対しての対話が家庭でも広がりを見せ、ミーティングにおいて様々な葛藤や正確な答えのない「仲間ってどんなものかな?」など、その時の気持ちや思いを出すことを自然と楽しみ、そして聞くことを繰り返していった。	
		(取組日) 令和7年 10月11日 ～ 令和7年 10月11日	
		(実施内容) 運動会ダンス中の仲間からの声 ミーティングの時間を積み上げ仲間づくりを楽しんで迎えた運動会当日、対象となる男児Bは、結果的に年長のダンスもリレーも参加することができなかった。しかしながら、ダンスに夢中になり観客の応援や視線を楽しんでいた年長の仲間の一人が、保育者の膝の上に座り込み眺めていたその年長男児Bに対して踊り続けながら「～ちゃん、おいで、楽しいよ!」と声をかけているのを見て、仲間となりつつある、ある男の子が、なぜか参加できない?参加しようとしないう男児Bに対して、その姿を肯定しながらも自然とその時の自身の気持ちがあふれ出ているように感じられ、この先の保育に対して何か仲間が作られていくことに対する可能性のようなものを感じることができた。	 
		(取組日) 令和8年 3月4日 ～ 令和8年 3月4日	
		(実施内容) 保育者によるまとめの話し合い 支えを必要とする子どもを取り巻く仲間たちが、一人の極端な言動や行動を起こす子どもを受け入れていく過程において大切であることを教職員間で話し合った。男児Bは当然であるが、まずは、それぞれが仲間とのかかわりや遊びをとおして気持ちが満たされ満足できている状態であること。また、相手に対して忌憚なく思いを出してみたりなど自身の気持ちを自然と表現できる生活環境が整っていること。そして、これらのことを大切にするとときに常に”少人数でのかかわりや活動とすること”が不可欠であること。振り返ると生活や保育そのものが、子ども主体の活動となりワクワクしたものとなることが大切であることも感じることができた。	

効果検証報告書（継続事業用）

施 設 名	葛飾こどもの園幼稚園				
教 育 理 念	愛され必要とされる実感を持ち、多様な人を受け入れつながり合う人間教育の追求				

事業の区分(5領域)	幼稚園教育要領に示された5領域に該当するもの(複数可。最も当てはまるものには◎を選択してください)				
	健康 ○	人間関係 ◎	環境 ◎	言葉 ◎	表現 ○

1 事業名	インクルーシブな保育実践の推進 ―活動の見直しから仲間となっていく過程―				
2 事業概要	林間保育(2泊3日新潟県お泊り保育)の活動の見直しをとおして、仲間で気持ちを合わせて活動することが困難な子に意識を向けながら、小さなグループ活動(クラス年長児7名)を繰り返して林間保育での経験と運動会のリレー競技やダンスをとおして仲間となっていく兆しが見えてくるところから、インクルーシブな保育実践を考える。				
3 対象学級(クラス名) 対象人数	(クラス名: ばら組年長児)			7 名	

計 画 時	4 実施体制	取組に必要な環境(人員、事業の遂行に必要な技能やノウハウ等)の保有状況				
		大学教員との月1研究会や研修会(園全体)、療育機関等の心理士、相談員との月1ケース会議(クラスごと)、シンポジウムや研究発表での他園との話し合い(有志)、在園また卒園児保護者による外国籍家族支援、地域開催の研修会参加などを通して、園又は保育支援担当者による園内保育検討会や会議、報告共有の場の設定。				

計 画 時	事業後	4についての効果・検証	事業実績から推測される効果や改善点等		
			一人の子どものオーダーメイドが必要な保育のためには、一人の担任による試行錯誤だけでは無理があり園全体での協力関係、コミュニケーションが不可欠となるが、それと並行して幅広く様々な立場の先生方とつながりを持ち、保育者とは違ういくつかの視点で捉えることにより、現場保育者がチームで考え深く試行錯誤する場が作られていった。		

計 画 時	5 事業のねらい	今年度の”活動の見直しから仲間となっていく過程”とは、仲間活動に参加することに困難をおぼえる子どもの場合、多くのケースで”相手によくない行動をとる”ことがよく見られる。皆と一緒に楽しみたい気持ちはあるのに集中が続かないとか、友との関係が作れずいざこざを起こしてしまう、じっとしていることができず外に飛び出してしまう、友達にちょっかいを出してしまうなどの行動が顕著となる。まずは、このような行動を起こしてしまう原因を捉えその子に合わせた保育活動を作っていくことが必要となるが、その上で、その子が少人数の仲間と活動を繰り返していくなかで、その対象となる子どもに視点を置き周りの子どもたちが楽しめる活動を作っていくことにより、周りの子どもたちが対象児の存在を意識し関心を持ち、よい面を知りかかわることにより柔軟につながりが作られていくことをねらいとする。これらは、子どもたちだけではなく関係する保護者の方々も、子どもたちの話や園からの報告などを通して子どもたちの様子を感じ仲間の楽しんでいる様子を知り、対象となる子どもを理解していくきっかけとなることを期待している。		
	事業後	5についての効果・検証	事業実績から推測される効果や改善点等	

事業後	5についての効果・検証	対象となる子どもにかかわりのある周辺の子どもたちやその保護者の方々が、理想としては理解をもって包み込んでくださるような生活となることをねらいとしているが、実際には時間をかけて作られていくクラスの運営となり、今回の地道な取り組みが”インクルーシブな保育”となっていくためのきっかけとなると感じている。周りの仲間や保護者の方々が、自然と自分を受け入れてくれているという実感を持てる生活が基盤として整っていくことがあり、仲間による活動が自身を表現しながら参加できるものとなった。特に、本音を出しながらぶつかり合う時間も大事にしてきたことや大好きな友だちの声を聞き受け止めるように過ごしてきた話し合いの場の効果が大きく、保育者の役割が重要になるが子どもたちの関係作りに大きく影響したと考えられた。		
-----	-------------	--	--	--

計画時	6 取組の内容	計画スケジュールを含む詳細な取組内容、経験させたい内容等 ①対象児やその周辺でかかわりが生まれるであろう子どもたちの観察と見守り。 4月 ②見守りから必要とした対象児との個別的なかかわりと2, 3名の仲間活動。 5, 6月 ③林間保育に向けた少人数での話し合いをととした仲間づくり活動。 7月 ④林間保育当日の実際活動やそのための話し合い活動。 7月 ⑤運動会に向けての少人数での話し合いをととした仲間作り活動。 9月,10月 上記のうち、幼稚園教育要領に示された「内容」について、各園で積み重ねてきた取組を発展させた点 自由遊び時間時に個別的な遊びをととしたかかわりを積み重ねる。対象児の興味関心を感じながら共に楽しみ、興味関心に沿った遊びが展開できるよう進めていく。言葉について気持ちを話すなど丁寧にかかわりながら、葛藤したりうまくいかないことなど言葉にして出すこと。対象児以外の共に活動する仲間について、とくに対象児を意識していくように考え思いを言葉にすること、そして、それらを丁寧に受け止めることを意識する。 (継続事業のみ記入)前年度の取組から発展させた点 今年度は、対象となる子どもに関係する”周りにいる子どもたちの成長”に視点を置き保育を展開した。周りで共に活動する、又はクラスを共にする仲間が対象児を意識して知り合い、理解して共に生活していくためのきっかけを作ること、足掛かりとなる保育とすることが今回の目標となる。
		事業実績から推測される効果や改善点等 結果的に、小さな接点やかかわり、共感するような活動が生み出されてきたと考えている。難しかったのは、年長児のみ7名という小さな活動をメインに繰り返してきたが、対象児とその仲間たちをつなげていく時に、対象児に意識を持ち配慮して活動を進めるが周りの子どもたちが興味関心を持ち自ら動き出すような活動内容であることが必要となるため、一人ひとりの子どもとつながりがあり知り合っていることが大事な点となる。どれについても特別な方法を用いた保育や療育的行為ではなく、保育として少人数にして分かりやすく、丁寧なやり取りや対話を繰り返し積み上げてきたものである。これにより、対象となる子ども自身も周りの子どもたちにとっても、皆から認められ受け止められていると感じることができた保育となっていたと感じている。
計画時	7 環境構成例	これらの保育を進めていくためには、園としての方針とクラス内での了解、理解が必要となり、複数担任の柔軟な役割交代や保育計画の変更などを行うことのできるチームとしていくことが大切である。子どもの声や様子から、柔軟に保育を変更したり保育者を入れ替えることのできる意識を持っていること、そして、そのための時間や場所を保証してくれるチームであることが重要となる。 これらのことを試行錯誤しながらチームとして共に考え継続的に検討していく場が計画的に作られていくことである。この”考え検討していく場”が整えられていくこと、常にその時の課題や問題を仲間と共有しているチームであること。 これらの、柔軟に保育を作り出していくことのできる環境と、そのことを定期的に振り返り方向修正していくことのできる場が整っていることの2つが揃って可能となる保育である。これらのことは、より園全体で常に確認され意思疎通がなされ問題意識を共有していることが前提となる。このようなことが、年月をかけて積み上げられていくことにより、柔軟な保育をチームとして作りやすい環境としていくこととする。
	事業後 7についての効果・検証	事業実績から推測される効果や改善点等 今回については、クラスの担任ではない保育者(保育支援担当という、保育者に対しても認知されている、全クラスの状態把握や対象となる子どもの保護者とのコミュニケーションを積み上げてきた配慮を必要とする全クラスの子どもを意識し動くことのできる保育者)が保育経験3年目の保育者と共に活動を計画し行い振り返りを繰り返した。給食を含む40分程度をクラスから離れ別室で活動を静かに繰り返すことができたことは、クラス担任3名とコミュニケーションが取れる関係性が作られていたことで、クラスの仲間と活動する環境が作られていったと考えている。

計画時	8 期待される効果 児童の姿	取組を通じて期待される児童の姿や効果等 友だちと楽しむ意欲や力は持つてはいるが仲間と楽しむ活動など参加が難しい対象児にとっては、その分かりにくい理由を説明することができず周りの大人たちも理解することが難しいこともあり、自分のことを理解しようと寄り添い活動していることを実感して仲間活動を楽しくもうとする姿を目標とする。そして、その周りの子どもたちが対象児に対して目を向け意識して知り合い、近づき小さな接点をいくつも作り出すことにより、その子らしさを自然と表現して友だちと心地よく過ごし活動できる姿を期待する。
	事業後	事業実績から推測される効果や改善点等 仲間との接点を作り出すグループ活動については、いくつかの課題も見えてきた。クラスを離れて1か月という長い期間活動していく必要があったが、長期に渡り別々の保育となった。また、対象児とその他の子どもたちが共に楽しむ活動を考え繰り返していくことを続けていくためには、他クラスの保育者や保育支援担当者などと試行錯誤しながら子どもたちの様子に合わせて保育をオーダーメイドしていくことに苦労があった。しかしながら、新たな保育や活動が生み出され生き生きと活動を楽しむ子どもたちの様子を感じることができた。その結果、クラスの仲間として対象児に対して皆が一斉に注目して期待するような場面も見られるようになっていった。
	9 効果検証総括	事業を通しての感想、今後の教育・保育に向けて この一年をとおした”対象児を取り巻く周りの子どもの成長”を考えてきたが、林間保育（お泊り保育）での活動内容や新たな計画を子どもたちの様子に合わせて柔軟に変えていくことから、少人数で話し合い保育者も意見しながら、向き合うことのきっかけが生み出されてきたように感じている。対象となる子どもについては、仲間とうまく活動できない状況や自身を客観的に捉えることができない段階で、その時の気持ちや思いを言葉にして表出する子ができず、なにか気持ちが不安定になり人に対して危害を加えるなどの行為を繰り返してしまっていた。このような状況の中で一番必要であろうと考えられたのが”仲間と共感を持って楽しむ時間”であった。保育者を介して言い合いを繰り返しながら徐々につながりがつくられ仲間から認められた居場所が作られることにより、安心感やワクワクする保育をとおして安定した生活が見られるようになってきたことを園全体で感じることができた。

※必要に応じて、別紙の添付やイラストの活用などにより事業説明を補足しても構いません（別紙は任意様式）。

※幼保連携型認定こども園教育・保育要領における教育のねらいや内容等については、幼稚園教育要領の5領域から構成されていることを踏まえ、本事業では「幼稚園教育要領」とのみ記載しています。